

令和7年度 第4回 T A I T O フューチャースクール検討委員会

開催日	令和7年12月4日(木) 午後4時00分から午後5時30分まで
場所	台東区役所 6階 教育委員会室
出席委員	高橋委員、垣野委員、土肥委員、小出委員、田中委員、渡邊委員、佐々木委員、山田委員、中島委員、仲田委員、宮脇委員、増嶋委員
配布資料	① 資料1 TAITO フューチャースクール検討委員会_中間報告(案) ② 資料2 モデル校報告_上野小学校 ③ 資料3 モデル校報告_駒形中学校

■議事概要

1. 開会

(1) 事務局提案

・中間報告(案)について

中間報告書の構成を、教職員の資質向上、情報活用能力育成カリキュラム、学校 DX 化の推進、教育環境の整備、生成 AI の利活用の 5 項目に統一した。「校務用端末と学習用端末の一体化」について国の方向性に合わせて修正するとともに、「ゆとりの創出と活用」の記述を区民にとってよりわかりやすい表現に改めた。第二版生成 AI の利活用ガイドラインを本年度中から作成開始し、早期に各学校に配布する。

土肥委員:生成 AI 利活用の方向性とスケジュール感の提示について質問

増嶋委員:第二版ガイドラインを本年度中に作成し、小学生の利用制限を段階的に解く方向で検討する旨を提案

高橋委員長:AI を表計算ソフトのような道具として位置づけることで誤解が減る旨を指摘

小出委員:片廊下型とオープンスペースの違い、駒形中学校改修時の変更有無について質問

増嶋委員・中島委員:平成元年導入のオープンスペースを継続活用し、教室配置の形態にかかわらず指導法を工夫する。駒形中学校は既設レイアウトのまま進める旨を報告

垣野委員:発達段階に応じた学びが中間報告に盛り込まれるか、各校展開時に学年別の道筋が必要ではないかについて質問

増嶋委員・田中委員:各校展開時に「低学年～高学年」の明確なストーリー性が必要であり、台東区全体で統一する方針を提案

高橋委員長:「あり方」と具体的施策の対応が不明確であること、「問題解決力」の方が本質的ではないかについて指摘

田中委員:「高いところぎしの育成」が教員にフィットしていないこと、理念と現場実践のギャップを最終報告で検討したいことを提案

増嶋委員:「学びのキャンパスプランニング」の継続化、ICT 活用による継続的学習への発展を提案

渡邊委員:文部科学省の動向を踏まえた導入ルール整備と、教員自身の AI 活用法の検討を望む。

(2) モデル校報告

(ア) 台東区立上野小学校

上野小学校は「これからの時代を開く学校づくり」をテーマに、児童の主体性育成と段階的な学びを推進している。低学年では一斉指導が中心だが、学年進行に応じて児童への決定権委譲を段階的に拡大している。

Google Workspace を活用した指導案検討の可視化、児童が「没頭」する環境づくり、「学校は出会う場所」という視点の導入など、多面的な取り組みが進められている。生成 AI 活用では、Gemini による授業のアイデア出し、カスタマイズ可能なカリキュラム自動生成、議事録作成、画像生成など、教員の業務効率化と授業の質向上に活用されている。児童による利用は現在ガイドラインにより制限されているが、5、6年生での「壁打ち」的活用の展開を期待している。

(1) 台東区立駒形中学校

駒形中学校は ICT を活用した「個別最適な学びと協働的な学び」の一体的な充実を目指している。「気づきメモ」による思考の可視化やジグソー学習の導入により、クラウドベースツール、電子黒板、Kahoot!アプリなど段階的に実践を深化させている。働き方改革への効果も実感しており、AI による職員会議・研修要約で 20～30 分、スプレッドシート活用で朝の打ち合わせ 7 分の時間短縮が実現。全員の意見が AI で可視化・要約されることで、多角的な議論が促進されている。課題として、教員間の ICT 習熟度のばらつきがあり、やる気のある教員への支援が集中する傾向が見られることから、支援の均等化が必要である。

土肥委員：プロンプト作成の横展開の可能性と実施結果を質問

田中委員：Gemini で国語時数の削減と情報能力育成を作成。教科専門性の高い教員の精査、条件入力と例示提供、教員の意欲が必須と提案

渡邊委員：採点ソフトは半年で浸透。環境整備で加速するも、意欲のある教員の先行利用で全体普及が課題と報告

小出委員：生成 AI のアイデア出しの有効性、子供による AI への問題の投げかけが子供の問題解決能力向上に資する可能性を提案

高橋委員長：意識の横展開の困難性、自己ベストの重視、Google Workspace の根本的な情報管理転換を指摘

(3) その他

・垣野副委員長による学習環境の整備・活用に関する最新動向についての講話

垣野副委員長は、学校を「Place to meet」(出会う場)として捉え、物理的な環境設計が児童の予期せぬ「出会い」と学びの質を決定することを強調した。海外事例として、オランダの図書館は動線を工夫した本との出会い、ドイツのラーニングハウスモデルは中央オープンスペースで柔軟な学習形態を実現 (ICT 機器はほぼなし)、岐阜市の義務教育学校はリノベーションで採光改善と縦の交流を実現している。上野小学校では、複数の姿勢オプション(座る、立つ、寝そべるなど)を実現する家具配置と、動線上の図書配置により、「選択の連続」と「本との出会い」を仕組みとして機能させている。副委員長は、こうした環境設計をパターン化し、施設規模に応じた複数の「レシピ」として他校に提供する可能性を指摘した。

土肥委員：取り組みのデザインパターン化の可能性、児童数・スペースに応じた対応について質問

垣野委員：4 要素の「レシピ」化で方法化が可能。児童数・スペース別の複数パターン対応、ICT 活用と組み合わせ TAITO フューチャースクールモデルを提案

高橋委員長：環境整備は校長の経営方針次第。使い方の理解が重要で、自己ベストを重視すべきことを指摘

小出委員：良好な動線確保と図書配置による読書機会の向上について提案

・高橋委員長による講話

世界の ICT 活用が 3 パターン(ヨーロッパ型:ICT 機器を限定的に活用、シンガポール型:既存授業形態を維持しながら効率化、日本型:個別最適な学びの実現に ICT を戦略的に活用)に分かれ、35 人学級での個別最適化実現は世界的に稀であることを指摘。

Google は日本の小学校の授業動画に多言語翻訳を付けて国際発信しており、既に 8 万アクセスを超えている。各国が揺れ動く現在、台東区のアプローチの独自性と有効性を自覚し、推進することが重要である。

校長のリーダーシップと教職員の意識改革が環境整備の成否を左右することも改めて確認された。

・事務局よりお知らせ

来年度は検討委員会を 4 回開催し、モデル校の実践深化と台東区内学校への横展開を中心に、最終報告書作成に向けた検討を進める。委員の任期は原則継続だが、保護者代表は推薦に基づき交代の可能性はある。

3. 閉会

高橋委員長は、本年度の検討で「学校に来てよかった」と感じられる環境づくりの重要性を確認。全員が同じゴールを目指す発想から、一人一人の「自己ベスト」追求へ転換することを強調した。